



CLINICALPATH NEWS

Japanese Society for Clinical Pathway
日本クリニカルパス学会

No.
23

発行日
2010年3月15日

in 愛知

「愛知クリニカルパス合宿」を 開催しました

2009.10.31 ~ 11.1

愛知クリニカルパス研究会 代表世話人 松田眞佐男
(事務局：社会保険中京病院)

2009年10月末、総勢35名の参加の下、愛知クリニカルパス研究会主催の「愛知クリニカルパス合宿（パスパ in 愛知）」を開催いたしました。

「愛知クリニカルパス研究会」は2001年に発足し、現在まで14回の研究会を開催するなかで、会の繰越金がある程度まとまった額となってきました。そこで、何か会員へ還元できるイベントを開こうと言うことになり、吉田先生（名古屋大学）や岡本先生（トヨタ記念病院）に相談したところ、福井総合病院の勝尾先生が開催しておられる「パスパ」を名古屋でやろうということになりました。勝尾先生には快くお引き受けいただき、ここに「パスパ in 愛知」の開催が決定されました。1年半ほど前のことでした。

「パスパ」とは「(クリニカル)パス」と「スパ(温泉)」を合わせた造語で、2日間のグループワークを通して、パスの理念を確認しつつ実際にパスを作り上げるというものです。対象疾患を「市中肺炎」と決め、中京病院で20例のカルテを用意しました。勝尾先生と吹矢さん（福井総合病院看護長）が事前に来院され、カルテ内容をつぶさに調査、記録していかれました。その際に、開催施設（あい健康プラザ）の都合で、今回ゆっくり温泉に入る時間が確保できないことが判明し、福井総合病院の登録商標とも言える「パスパ」の使用は不許可となり、「愛知クリニカル



パス合宿」と名称変更となりました。

1日目は午前9時に勝尾先生の講義「クリティカルパスとは」でスタート、例の早口で1時間半に渡りまくり立てられ、一同目を覚ました。引き続きグループワークに移り、20例のカルテから各種診療項目の収集、その標準化とアウトカムの設定、そして日めくりパスの作成がなされました。この間に1時間半の懇親会（宴会）をこなし、終了は午後10時でした。その後、スタッフの方々にはパスのコンピューター打ち込みを深夜までしていただきました。誠にご苦勞様でした。2日目は午前8時半より、自グループのパスの検証および発表（きつい質問も多数あり）、さらにヴァリエーション分析までを行い、正午に解散となりました。参加者一同、大変に疲れはしましたが、大きな達成感と満足感を胸に帰途につきました。

私自身としては当初、温泉につかりながらゆっくり見学するつもりでしたが、勝尾先生よりフル参加を命令され、

久方ぶりにパス作りに汗を流しました。それに加え、罰ゲームの対象者の一人となり、この原稿を書くハメともなりました。しかし、今では皆様に心より感謝しております。

その後の参加者へのアンケート調査では、満足度90%以上との評価をいただきました。ゆっくり温泉につかれなかったことが唯一のネガティブ要因でした。勝尾先生、吹矢さんには、そのパス教育活動に敬意を払うとともに、重ねて御礼申し上げます。



in 岐阜

第10回日本クリニカルパス学会 学術集会を終えて

2009.12.4～5
社会医療法人松波総合病院 副院長 松波和寿

平成21年12月4日5日、岐阜市において第10回の学術集会を開催させていただきました。本会を開催するにあたって打ち立てたアウトカムは、①参加者が楽しむこと、何かを得て帰ること、②赤字にならないこと、③10周年を皆で祝うこと、の3つでした。

メインテーマを「原点回帰」とし、参加者各自がパスの原点、自分の原点を少しでも感じ取っていただければ①は達成されたと思います。ゆとりを持って移動できるように、一般演題はすべてポルター発表形式としました。この形式は賛否両論あるでしょうが結構良かったのではないのでしょうか？

②に関しては2600名超の参加者を始め、多くの協賛企業の方々のおかげで無事達成されました。これだけの規模の学会開催は当法人としてはもちろん初めての経験でし



た。実行委員の面々が実に良く頑張ってくれました。自分たちでできることは極力自分の手でと、知恵を出しあって様々な難題を解決してくれました。このような職員に恵まれて本当に嬉しく思いました。また彼らは私の誇りでもあります。これを気にさらに一致団結して前進していけると思いました。

振り返るとこの10年はあつという間でした。10周年記念講演、記念シンポジウムを拝聴することでクリニカルパスの、また本学会の存在意義が再確認されました。アウトカム③に関しても達成できたのではないかと思います。パスを通じて全国の多くの仲間知り合えたことが最大の喜びでもあります。

当然バリエーションもありました。小さなことは数え切れません。一番のバリエーションはパス教育セミナーの会場において想定以上の聴講希望者があり、立ち見どころか最前列で床座り見の方が出るほどでした。多くの方にご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。でも初期の頃のパス学会の風景を思い出して何故か嬉しかったです。このセミナーの様子はDVDに記録されていますので何らかの形でいづれ見ることが可能になると思います。

歴代開催地で最も小さな都市で開催致しました第10回学術集会は、歴代主催者で最も弱小の私立病院である松波総合病院がなんとかやり遂げました。全国のパスを愛する施設の方は今後の開催に是非名乗りを上げてくださいね。大変でしたが得たものは大きいです。

本学会学術集会開催の機会を与えてくださった皆様に感謝致します。



in 岐阜

日本クリニカルパス学会 第10回学術集会賞 最優秀賞受賞によせて

2009.12.4～5
トヨタ記念病院 呼吸器科 杉野安輝

2009年12月4日、5日に岐阜市で開催されました第10回日本クリニカルパス学会学術集会ポスター発表にて最優秀賞を受賞いたしました。発表の瞬間は「まさか？」と頭が真っ白になりましたが、会場から沸きあがる祝福の拍手で我に返り、やがて心地よい大きな感動の波に包まれました。記念すべき第10回という節目の学会で、このような栄誉ある賞を受賞できましたのも、パスに関わるチーム医

療スタッフ全員のたゆまぬ努力のおかげです。この紙面をお借りしましてスタッフの皆様方に深謝いたします。発表のテーマはDPC データを活用した肺炎パスの改善でした。当院では2005年4月からパスによる標準化と臨床指標による質評価に取り組んできました。2006年4月からはDPCが導入となり、コスト改善も重要課題となっています。特に肺炎は重症度や合併症がさまざま、出来高と比べてDPCでの診療報酬は大変厳しい状況にあります。今回の研究では、肺炎DPCデータを用いて他施設とベンチマーキングを実施し、肺炎診療について当院の「立ち位置」を確認するとともに、肺炎診療プロセスやコストの詳細を優良病院と比較しました。その結果、当院はジェネリック抗菌薬の採用などで注射コストの削減は図れていましたが、注射抗菌薬の使用期間や経口抗菌薬へのスイッチ時期に関しては、まだ改善の余地があることがわかりました。当院の肺炎診療では95%以上の適用率でパスを運用し、診療プロセスのパス化が達成されていたため、DPCデータ分析によってパスの改善点を容易に見出すことができました。さらに、コスト削減を視野にいたしたパスの改善策として、パス適用日数の短縮と併用抗菌薬の削減を試みたのですが、在院日数の延長や注射コストの増加、臨床指標（初期治療成功率や死亡率）の悪化という事態となってしまいました。コスト削減を重視しすぎると診療の質を損ねる危険性があり、エビデンスに基づいたパスは診療の質保証するための重要なツールであることを再認識する結果でした。DPCデータの活用には、パスによる診療プロセスの標準化と臨床指標によるアウトカム評価が必要不可欠です。トヨタ記念病院では、今後も「パス」、「臨床指標」、「DPCデータ」を有機的に活用することで、診療の質とコストの「KAIZEN」に取り組んでいきます。

日本クリニカルパス学会第10回学術集会賞 受賞者

最優秀賞：

トヨタ記念病院 杉野 安輝

優秀賞：

医)昌峰会加藤病院 榊原 英晃 多摩南部地域病院 信夫 あき子
 聖隷三方原病院 永江 浩史 松波総合病院 杉江 由美子
 東京医科大学病院 宮崎 留美子

入賞：

福井総合病院 吹矢 三恵子 青森市民病院 橋爪 正
 熊本機能病院 渡邊 進 武蔵野赤十字病院 宋 磨美
 長浜赤十字病院 高橋 健志郎 JA厚生連岐北厚生病院 太田 ちなつ
 岩手県立胆沢病院 鈴木 理恵 神鋼病院 有村 美紀
 高知県立幡多けんみん病院 西村 裕之 埼玉医科大学短期大学 鈴木 妙
 横須賀市立市民病院 弘田 伴子 愛整会 北斗病院 林 隆裕
 琉球大学医学部附属病院 仲本 奈々 松戸市立病院 時永 耕太郎



リレーエッセイ 第17回
クリパス、マエバシ、マイライフ
 前橋赤十字病院 呼吸器内科 副部長 堀江 健夫



群馬県をご存じでも前橋となるとあまりなじみがないようで、「どんなところですか?」とよく聞かれます。関東平野の最奥に位置する前橋は、もっとも海から遠い県庁所在地で

すが冬は空っ風と青空。降雪もほとんどなく、台風・地震といった自然災害も少ない、全国有数の農業生産力(畜産業は全国5位)を誇るおだやかな住みやすい町です。糸井重里や萩原朔太郎といったクリエイティブな方を輩出したのもそんな土地柄のせいかもしれません。市政面では行政サービス調査で暮らし優先の施策が評価され平成20年県庁所在地の中で全国トップの評価をいただきました。加えて医師数も全国平均の倍近くに達し、医療連携も実践しやすい環境にあります。そんな素敵な街から前回担当の下村さんからご紹介いただいた気管支喘息の連携システム構築の経緯を中心にお話していきたいと思います。

私とクリニカルパスとの出会いは今から8年前にさかのぼります。留学生生活を終え、ほとんど医者から離脱しかけていた私は、「このままでは医者でなくなってしまう」という危機感に突き動かされて、清水の舞台から飛び降りる思いで当院に赴任しました。折しも当時はパス発展期のまっただ中で、想像を超えた急性期病院の忙しさのなかでも効率よく医療が提供できるパスはまさに救世主、仕事の合間を縫って病棟スタッフと新たなパス作成に楽しい時間を過ごしたことが思い出されます。



▲ パス室でのひととき
前列左より矢嶋美恵子看護部副部長、
筆者、後列左より安藤立正運営部会長、
笹原啓子パスナース、矢島純子パスナース

赴任後しばらくしてもう一つの課題に直面しました。当院は地域医療支援病院として産声をあげたばかりで、患者さんに近医での通院に切り替えていただくことが至上命令となっております。しかし紹介した患者さんが2〜3ヶ月で戻って来てしまう、紹介したとたん治療が中止となって病気が悪くなって再入院となった等々たくさんの苦い経験をしました。

安定期の管理を標準化して地域に広め、質を担保しながら、継続性のある連携診療を提供するためには紹介状一枚ではだめでシステムが必要であるということに一年ほど経ってからようやく気づきました。

そのような中で思いがけずブレイク・スルーが訪れました。2004年2月パス学会主催のオーストラリア研修に参加する機会をいただいたのです。訪問先のシドニーでは医療システムの改革が断行され、急性期病床の削減や病院の統廃合が問題になっていました。それも1000床の病院4つが1000床の病院1つにする桁外れの統合です。そのような混迷のなかでスタッフは現場を放棄することなく、KAIZENを目指しておりました。制度上の変化に現場の医療システムを柔軟に対応させ、かつ医療の質を高めようと州保健行政のスタッフも一緒に関わっていく姿勢に心を動かされました。

研修から戻り考え直しました。連携システム構築には地域とつながる外来、特に喘息においては発作時のアクセス先である救急外来の標準化が必要です。救急外来のパス担当看護師をはじめとするスタッフの協力によって2006年に最初のERパスができ上がりました。以後多くのスタッフの参加・支援によって開業医との勉強会、ぜんそくカード、地域連携パスなど種々のプロジェクトが実施され、地域喘息診療のフレームワーク(枠組み)が構築できたのです。喘息死も都道府県別で2005年には全国平均レベルでしたが、2008年には全国2番目に少ない県になっています。今後群馬県全体に連携システムを広げ、さらに多くの患者さんにとって安心できる体制が構築できることを願っています。

現在の前橋赤十字病院のクリニカルパス活動について簡単にご紹介したいと思います。パス委員会は本学会のパイオニアの一人である池谷俊郎副院長をリーダーに多職種総勢36名からなります。2008年から専任業務を行う看護師

(パスナース)2名が配置され、新たに2つの部会を発足しました。運営部会はパス大会の運営、パスの管理、スタッフ教育などを扱い、作成改訂部会はパスの作成支援、多職種による審査、年1回のバリエーション解析・改訂の支援を行います。パスナースは両部会をうまく舵取りするコーディネーターとして、病棟のパス担当ナースの相談役として活躍しております。多くの仲間と一緒にがんばるパスを次の世代にも受け継いでほしいという願いが日々のパス活動を支えています。

私たち医療者は限られた大切な医療資源を連携によって有効に活用することで、提供する医療そのものの価値を高めていくことを目指していくべきです。医療者が楽に、患者さんも幸せになるツールとして地域でもっとパスを活用してほしいと思います。

自分の10年を振り返れば、“今ここにある危機”が行動の原動力だったようです。アラフォーの心臓にはあまりいい燃料ではないと思います。そろそろギアチェンジの時期かもしれません。我が人生のオーバービューに“ワーク・ライフバランスを保ち、QOML (Quality of my life) を高める”というアウトカムを書き加え、ペンを置くことにします。

次のリレーエッセイは浜松で在宅緩和医療の連携活動を推進されている薬剤師の前堀直美さんをお願いします。

事務局から

今後の活動予定

- 7月3日 2010年度クリニカルパス教育セミナー(東京)
- 7月31日 2010年度クリニカルパス教育セミナー(大阪)

第11回 日本クリニカルパス学会学術集会

会期：平成22年12月3日(金)4日(土)
会場：ひめぎんホール
(愛媛県県民分庁舎)

会長：河村 進 (四国がんセンター)

テーマ：

「変革—さらなる良質医療を求めて—」

プログラム：

特別企画、特別講演、教育講演、
シンポジウム、パネルディスカッション、一般講演、
デジタルポスター、ランチオンセミナー、パス展示、
市民公開講座 など



発行

日本クリニカルパス学会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-33-12 ビラビアンカ 202

TEL.03-3470-9978 FAX.03-3470-9962 ホームページ：http://www.jscp.gr.jp/